

侵略的外来種の防除と生物多様性の保全

金沢大学環日本海域環境研究センター 西川 潮

生物が本来の生息域を越えて運ばれると、新天地で定着・増殖・拡散して侵略的外来種（侵入種）になり、生物多様性や生態系に甚大な影響を与えることがある。しかし、そもそも生物は如何にして侵入種になるのであろうか？生物の侵入成功を説明するうえで、現在までにいくつかの仮説が提示されている。本発表では最初に、主要な仮説に基づき、生物が侵入種になる過程や、その要因について考察する。

侵入種の影響は、生物多様性や生態系だけでなく、生態系サービスという形で人間社会にも波及する。その影響は、負の場合もあれば、正の場合、ゼロの場合もある。そのため、侵入種は時に光と影の両側面を持つ。例えば、コイ（飼育型）は、ユーラシア大陸の様々な国を原産とする外来種であり、湖沼生態系のレジームシフト（安定平衡状態の変化）を引き起こす一方で、水産業に多大な便益をもたらしている。実際、侵入種の管理に関しては、利害関係や価値観によって多様な考え方があある。侵入種の防除に関わる意思決定を行ううえで、公正な科学的知見の提示や費用便益分析の結果の提示等が、地域住民の合意形成を図るうえで重要になる場面があることを紹介する。

最後に、世界で行われている侵入種駆除に関する動向と課題を整理し、アメリカザリガニの駆除ならびに陸水域の生物多様性の再生を進めるうえでの課題について述べる。